ゲエズ語の「喉音法則」について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柘植, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/11887

言語研究 (*Gengo Kenkyu*) **70** (1976) 57～76

ゲエズ語の『喉音法則』について*

柘 植 洋 一

1. はじめに

1.1. 本論文でとりあげるゲエズ語 (Gəʿəz) は，時に古典エチオピア語，あるいは単にエチオピア語とも呼ばれる言語である。セム語族の通常の分類に従えば，北アラビア語・南アラビア語・他のエチオピア・セム諸語と共に南西セム語派に属する。エチオピア・セム諸語 (Ethiopian Semitic) は南・北に分けられるが，ゲエズ語はディグレ語及びティグリニア語と共に北エチオピア・セム語に分類される。

ゲエズ語の最古の資料は4c A.D. の碑文である。(Littmann, 1913 参照)。写本で最も早いものは13cのものであり，その頃には既に日常語としては用いられなくなっていたようである。Ullendorff は 9c～11c の状態が 'frozen state' のままで以後に伝えられたと述べている。(1965, p.122)[1] この時期の直接資料は存在しない。

1.2. この論文で喉音と総称するのは，h [x], ḥ [ħ], ʿ [ʕ], ʾ [ʔ], h [h] の 5 子音（まとめてLであらわす）で，これらの子音に隣接する母音の変化に関して『喉音法則』(Gutturalgesetze) がたてられて来た。『喉音法則』をめぐる様々な問題については既に Cohen の綿密かつ詳細な研究がある (1927) が，納得出来ない部分や不充分と思われる点があるので，本論文では主に Cohen への批判を通して『喉音法則』の内容を明確にし，更にそれに関連する形態論上の問題をとり

---

* 本論文は，1973年12月東京大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文の第三章および第四章にあたる部分を，その後の考えの修正，発展にともない，新たに書き直したものである。

1) Ullendorff (1955, p.13) は「8c～10cの状態」と述べている。ゲエズ語一般については，Ullendorff (1955) の 'Introduction' の項，或いは同 (1965) の第六章参照。なお，エチオピアセム諸語の分類については Hetzron, Robert: Ethiopian Semitic, Studies in Classification. (Manchester, 1972) 参照。

あげる。特に第二又は第三語根子音が喉音である動詞を検討する。ただし，あくまでもその中の重要な点に議論を限ったことをあらかじめことわっておく。

問題点の解明にあたってはゲエズ語自体の変化と，写本や伝承発音への他言語（特にティグリニア語）の影響とを峻別する事が肝要であり，出来るだけこの基本的立場を明らかにしたつもりである[2]。

2. 第一喉音法則

2.1. 喉音で閉じる閉音節に第一列母音[3]が立つ場合，そのかわりに第四列母音があらわれるという内容の第一喉音法則について，Cohen は，これを二通りに解釈すべきであると述べている (1927, p.26 ff.)。

一つは彼が allongement supposé と呼ぶ場合で，歴史的に母音変化が起ったと考えるのではなく，単に表記上の問題であるとしている（以下2.2.及び2.3.参照)。第二の解釈は allongement réel と名付けるもので，後続喉音の無音化（脱落）の結果，母音が長音化したとするのである (2.4.参照)。いずれにおいても喉音が存在していた限りにあっては，そこに母音の長母音化を認めるのは無理であり，そのような変化は「生きたゲエズ語」(guèze vivant) では起らなかったという考えを Cohen は持っているのである (1927, p.28)。この基本的は考えは Littmann の "Shon beim Anfang meiner äthiopischen Studien kam mir der Gedanke, daß ein Übergang von *ä'* zu *ā'* eigentlich eine contradictio in adjecto ist." (1929, col.572) という言葉をまつまでもなく妥当である。

2.2. ところで何故 Cohen は二通りの解釈をしなければならなかったのだろう

---

2) 伝承発音については Littmann (1917-18) ; Mittwoch, E.: Die tradionelle Aussprache des Äthiopischen. (Berlin und Leipzig, 1926) ; Cohen, M.: La prononciation traditionnelle du guèze (éthiopien classique). 'Journal Asiatique' 204 (1921), pp.217-269. 参照。

3) 第一列，第四列母音というのは，エチオピア音節表にもとづく母音の呼び方である。語源的考慮から第一〜第七列を「a, u (ū), i (ī), ā, ē, e (ə), o(ō)」と転写する伝統的方式と，「ä, u, i, a, e, ə, o」とする方式がある。参考にした文献では Dillmann 以下殆んどが前者であり，後者を用いているのは Leslau, Ullendorff である。卑見では後者の方がゲエズ語の母音体系をより良く示しているのでここでは後者を採用した。なお引用にあたっては原則として原文通りにしたが，誤解のおそれがないところでは後者に統一した。

か。それは彼がゲエズ語の第一列母音と第四列母音とを持続の違いに於いて対立するととらえているからである (1927, p. 22)。(これを ă : ā とあらわす。) Allongement supposé という解釈は CāL という音節構造を避ける為に必要だったのである。つまりこの場合の第四列母音表記は決して「長いａ」を示すのではなく，彼の言葉を借りれば "la voyelle *a* devant laryngale faisant partie après elle de la même syllabe résiste à toute altération de timbre et reste *a* pur" (1927, p.26) とあるように，'*a* pur' を表わしているというのである。

生きたゲエズ語で ă→ā という変化が起らなかったとの考えは，一つには碑文資料では第四列音表記が行われていない（即ち第一列母音で書かれている）という事から，また第二には初期の写本において第一列母音表記例もしばしばみられるという理由から支持されるとしている (1927, p.27)。そこで，同一音節の喉音の前の母音表記の変遷をまとめると以下の通りになる。

碑　　文……第一列表記
↓
初期写本……第一列及び第四列表記
↓
それ以降……第四列表記

即ち，Cohen は表記上の変化は音韻変化を反映しているのではなく，母音は一貫して'*a* pur' だと言っているのである。後に第四列表記が支配的になったのは，ゲエズ語が既に死語になっており，ゲエズ語表記の際に書記の母語の状態（＝ティグリニア語，アムハラ語では '*a* pur' は第四列で書かれる）が反映したからであると考えているのである。

ただし，Cohen の引用文中の 'toute altération de timbre' という句で以て何を表わしたかったのかは判断に苦しむ点である。Cohen 自身は日常語として用いられた時期のゲエズ語 (guèze parlé あるいは guèze vivant と呼んでいる) では第一列母音は '*a* pur' であったと述べているし (1927, p.27), C—L という環境でその音色が変化するとはそもそも考えられないのであるから，この句がどうして挿入されているのか判然としない。

2.3. さて Cohen が碑文のゲエズ語には当該例がないと述べている事は既にみたが，その例を示すことができるのである。1972年 Müller により発表された南

アラビアの Mārib 起源の碑文（=DJE 1+2. Degen-Müller-Röllig pp. 59-74）の23行目にある kälaḥku「私は告げた」（√klḥ I1, 1 sg, Pf.）[4] がそれである。この碑文のはっきりした年代は分らないが，遅くともアラビア半島からのアビシニア軍の最終的撤退（6c末）以前である。つまり，正にゲエズ語が「生きていた」時代のものであり，Cohen のように正書法上の解釈を行う事は出来なくなる。Allongement supposé という解釈が成り立たない以上，Cohen に従うならば allongement réel としなければならなくなる。しかしながら，allongement réel と考える事も，次節で明らかにするように出来ないのである。

2.4. Allongement réel としして挙げているのは，yətmawwā' ～ yətmawwā「彼は敗れる」（√mw' III 1, 3 sg. Impf.）の例である。二つののヴァリアントの存在から，喉音の弱化(>脱落)とそれに伴う先行母音の代償延長をそこにみようとするのである。しかし子音が表記されていない方のヴァリアントは，Littmann (1954, p. 364) 及び Ullendorff (1955, p. 35, fn. 4) の言う通り lapsus calami に過ぎない。そして ' の弱化もここには認められないのである[5]。Cohen の説明が一見妥当であるかの観を呈したのは，たまたま問題となる子音が ' であったからであり，kälaḥku のように ḥ の場合も同様に考えるのは非常に困難である。

2.5. 以上から明らかなように Cohen の解釈には賛成し難い。Allongement supposé と allongement réel との二つの場合に分けて考えられるべきではなく，統一的に解釈されねばならない。それは，ゲエズ語第一列母音と第四列母音を音色において対立するものであったと認め (Ullendorff, 1955, p. 212 も参照)，その上に立って単なる表記上だけの問題ではなく，碑文及び初期写本にみられる表記上の揺れがそのまま ä（第一列）→ a（第四列）という変化を反映したものとと

---

4) 略号をまとめて示す。√=語根。R_1, R_2, R_3=√語根を構成する各子音 (e.g. √klḥ では R_1=k, R_2=l, R_3=ḥ)。I 1 というクローマ数字＋アラビア数字の組み合せは動詞の各語幹形を示す。(Dillmann, Gr. § 76 参照．ただし Pllmann は I, 1 の様に表記) Pf=Perfect. Impf=Imperfect Indicative. Juss.=Jussive. Imp.=Imperative. IL, IIL, IIIL 動詞というのは各 R_1, R_2, R_3 が L の動詞。また本論文では R_2=R_3, $R_{1,2,3}$ のいづれかが w, y 或は L である動詞を弱動詞と呼び，それ以外を強動詞と呼ぶ。

5) Littmann (1954, p. 364) の 'In den alten Inschriften gilt das erste Gutturalgesetz noch nicht, ausser, wie es scheint, vor' im Auslaut.' という文は，kälaḥku の例からみても他の喉音の場合にもあてはまると思われるので，修正が必要となる。

らえるのである。一貫してこの立場に立つことにより，全ての事実に妥当な説明を与える事が可能になる。

早い時期の写本では第一列母音表記がしばしば見られるという点 (Cohen 1927, p.26 ; Dillmann, Gr., p.88)について少し述べよう。例えば先に引いた碑文DJE 1+2 の 25 行目には mä'män「信じ深い」(√'mn) という形があらわれるが，これは変化を蒙らない形である。この様に同一碑文に変化形とそうでない形とが共存している点から，この段階（6c?）ではまだ変化過程にあったと推定できる。そしてゲエズ語ではこの変化は完了することはなかったと思われる。(なお，mä'mänという語形についてはCohen 1927, p.33 参照)

あるいは，方言的差異に説明の根拠を求める可能性もあろうが，それは実質的には何の説明も与えないのと同じことになる。我々はゲエズ語の方言差の実体についてほとんど何も断言できないのだから。

時代が下ると第四列母音表記が優勢になるという事実については，前節で示した Cohen の意見と同じく，後の書記の母語の反映とみる。

2.6. 前節で述べた様に，ゲエズ語の第一列母音と第四列母音は持続(quantity)ではなく，音色 (quailty) において対立する。他のエチオピア・セム諸語でも同じである。

ところで，ティグリニア語には喉音の後という環境で /ä/ と /a/ の中和がみられる。即ち， /ä/ = [ɐ], /a/ = [a] が喉音の後の位置では [a] であらわれる (Palmer, p. 132)。Ullendorff はゲエズ語に関して，'a laryngal is never immediately preceded or followed, as a member of the same syllable, by ä' と述べている (1955, p.212)。喉音に後続する場合を考えてみると，ゲエズ語にもティグリニア語と同様の状態を考え得るであろうか。先の Ullendorff の言葉はどのような根拠に基いての言明か何ら理由があげられてない。例えば säm'ä √sm'「聞く」3 sg. m. Pf. と säm'a 同 3 pl. f. Pf. についてはどう考えるのであろうか。中和を示す積極的な理由がない限り，現代語と同じであったと考える事は出来ない。喉音の後においても ä と a の対立は保たれたとするのが適当であろう。碑文にあらわれる 'əḥzab (ḥəzb「民」の複数形，通常は 'äḥzab.) という，Cohen が問題にしているヴァリアント(1927, p.27)についていえば，ここでの 'ə

という表記が示しているのは，正に 'ä であって 'a ではないということ——即ち喉音の後でも ä/a の対立が存在したという事実——にほかならないのである[6]。

ただし，ゲエズ語にも，この位置で ä/a の対立がなくなる傾向のあった事自体は認めなければならない。この点を次節で述べよう。

2.7. Dillmann (Gr. §48) や Praetorius (p.17-18) には，喉音に続く ä がしばしば a と書かれるという記述がみられ，又この傾向は時代が下るにつれて著しくなるようである。先にあげた碑文 DJE 1+2 にも既にその例が三例みられる，18 行目の 'aw'ayku「私は焼き払った」(√w'y)，27 行目の nä'abbi √'by「我々は大きくなる」，それに 28 行目の tä'qṣu (√'ps)「彼等は罠にはまった」がそうであり，各々 'äw'äyku, nä'äbai, tä'äqṣu が期待されるところである[7]。

しかし，これらの例と後代の写本にみられる例とを等質のものととらえてはならない。後代の写本が呈する様相は書記の母語の状態（別言すればその影響を受けて変質したゲエズ語）を反映しているにの対し，碑文の例は基本的には ä/a の対立が保持されながらも，ティグリニア語にみられるのと同様な状態への移行が起りつつあった，あるいは全体的移行と言わないまでも既にその傾向があらわれていたという事実を示しているのである。

2.8. 最後に，第一喉音法則の例外といわれる場合を取り上げる。第一は，tämä'ä'ku「私は怒った」(√m" III1, 1 sg. Pf.) のように，先行子音と後続子音が同じ場合である。第二は，動詞語幹形の 'ä 及び不規則複数形 (broken plural) の 'ä (e.g. ḥəzb「民」—pl. 'äḥzab) である。これらは別々に分けて考えるべきものでなく，両者に共通する要因を，当該母音のあらわれる環境に求めることによって，まとめてとらえることができる。つまり，L—L という環境においては変化がおこらなかったのであり，第一喉音法則はこの条件を加えることによりはじめて厳密に定式化できるのである。なお，Brockelmann (GvG I §74 h) は第二の場合を 'Systemzwang' によるとしているが，勿論付加的要因として充分考えられるところである。

---

6) Ullendorff (1955, p. 213) 参照。

7) tä'aqṣu を第二音節の母音が a であるからといって III_3 形と考えるのは，-qäṣ- ではなく -qṣ- となっていることから不可能である。

3. 第二喉音法則

3.1. 第二喉音法則と呼ばれる ə→ä/ —Lä という変化について，Cohen の述べるところ以上に特に付け加える点はない[8]。

現代のティグレ語，ティグリニア語についての Leslau の記述 (1945 § 16(R), §§ 17-19 ; 1941 § 20(c), § 136(b, β)) をまとめてみると，ゲエズ語第二喉音法則と同様の規則が共時的にたてられる。ただし，ティグレ語のある方言では ə があらわれるし，ティグリニア語では ə ～ ä ～ a の揺れがみられる。なお，ハラル語（南エチオピア・セム語の一つ）にも ə のかわりに ä があらわれるという記述 (Cohen, 1931 pp. 288-289 ; Cerulli, § 35) は注目されるが，やはりここでも揺れがあるようである (Cerulli 同)。ティグレ，ティグリニア両語にたてられる共時的規則が音韻変化の直接の反映だとすれば，この変化はゲエズ語だけに起ったのではなく，エチオピア・セム諸語に広く及んだという可能性もある。古いハラル語にそれがみられる (Cerulli, § 135) という事実もこの推論を支持する。

ゲエズ語に戻ると，碑文からの例としては第一喉音法則のところであげた DJE 1+2 の nä'abbiがある (< *nə'äbbi)。写本については，年代が早いものでは ä でなく ə のあらわれる例が多い。Cohen は，第一に同化の時期はそれ程古くなかったということ，また更には母音は 'guèze parlé' では ə → ɐ と移行し，'*a* pur' には達しなかったということが考えられると述べている (1927, p. 30)。第一の点は，碑文に例がないという点がその根拠となっている訳だが，やはり碑文例がみとめられるので，遅くとも 6c には変化がはじまっていたと考えられよう。第二点は，初期写本の表記上の非一定性からの結論だが，第一喉音法則の項でも明ら

---

8) ① IL 動詞該当例は次の通り。なお（ ）内は強動詞形

I_1 Impf. yäḥäwwər √ḥwr (yəR_1äR_2R_2əR_3)

I_2 Juss. yäḥäddəs √ḥds (yəR_1äR_2R_2əR_3)

② II L 動詞

I_1 Imp. lä'äk √l'k (R_1əR_2äR_3)

③ IW III L 動詞

I_1 Juss. yäḥäz √wḥz (yəR_2äR_3)

④ 4 語根動詞で I L の場合

I Impf. yäḥärättəm (yəR_1äR_2äR_3R_3əR_4)

Juss. yäḥärtəm (yəR_1äR_2R_3əR_4)

以上明らかなように第一音節母音にかかわる。なお名詞形については他の喉音法則の場合と同様ここでは問題にしない。

かにしたように，‘guèze parlé’ の段階でも ‘*a* pur’ は第四列で書かれたと考えるのが妥当であり，ə→ɑ(ä) という変化がおこれば変化の結果の母音は第一列で表記されたはずである。従って ə→ä という変化そのものが完了しなかつたのである。

3.2. 否定の接頭辞 'i が付く場合には，'iyä-, 'iyə- の両形がみられる。(Dillmann, Gr., §44; Chaîne §28 I)。例えば，yäḫäddeg「彼は残す」(√ḫdg I1 3 sg.m.Impf.) の否定形は，'iyähäddəg あるいは 'iyəhäddəg である。この両形の共存は何を意味するのだろうか。古い母音がここではそのまま保たれていると考えることもできる。またあるいは，y- ではなくて t-(2.sg, pl ; 3sg.f.)の場合には 'itä— のみとなるので，この場合は，i と y というパラタルの影響によりäがəになっているとの推論も成り立つであろう[9]。

4. 第三喉音法則

4.1. 第三喉音法則は「喉音にä/a以外の母音が後続する場合，それに先行する母音äはəになる。ただし，III L 動詞 (四語根動詞ならば IV L 動詞) では，喉音に続く母音が ä/a であってもäがəになる。」という内容をもつと言われて来た。しかし，この法則は整理し直す必要がある。即ち，ここでは二種類の変化が一まとめになっているのでそれを分けなければならない。仮に次のようにまとめられる。

(1) ä→ə/ — LV_1 (V_1=ä/a 以外の母音)

(2) ä→ə/ — LV_2 (V_2=ä/a)

(1)，(2) 各々喉音に [−Low], [+Low] という母音が続いた場合である。

さて，(2) は先に挙げた内容の後半部に相当するが，詳しくは III L 動詞の項で述べるように，ゲエズ語 III L 動詞の I_1, III_1 形においてはもともと三人称形で penultima にäは存在しなかったと言えるので，これらの形はこの(2)とは何の関係もないことになる。また，R_3 ではなくて R_1, R_2 が喉音の場合にも変化が起ったとは考えられない。III L動詞の他の諸形でもこの変化は起らなかった(7.2 参照) ので，第三喉音法則は結局(1)の場合丈ということになる。第二喉音法則

9) Cohen (1927, p.40) にはある写本 (Juste d'Urbin fol.44 r°) には 'inə- (1 pl.) もあらわれるとの記述がある。

との関連からも(2)を想定するのは困難である。

なお，ティグレ語，ティグリニア語には第三喉音法則と類似した共時的規則を立てることができる。

5. typeβ と Philippi の法則

喉音法則を再検討して来たが，次に喉音動詞の問題に移る。その前に喉音動詞を考える上で重要な type β の問題があるので，まずここでは type β を検討することにする。

5.1. type α と type β[10]

ゲエズ語動詞では I_1 形と III_1 形において形態上異なる二つのタイプが認められる。これは，R_2に後続する母音の，Pf. 形と Juss. 形での違いにより区別されるもので，I_1 形の Pf, Juss. 両形は次の様になる。(3 sg. m.)

	Pf.	Juss.
type α	R_1ä R_2ä R_3ä	y∂R_1R_2 ∂R_3
type β	R_1ä R_2R_3ä	y∂R_1R_2 äR_3

基本的には Pf., Juss. 共に type α あるいは共に type βを持つが，type α-type β, type β-type α 等の組み合わせもみられる[11]。

5.2. Philippi の法則[12]

一人称及び二人称の完了形では type β においても R_2 と R_3 との間に母音ä があらわれ，type α と同じ構造を持つ。この母音ä について Littmann は 'Das *a* in der 2. und 1. Person beruht auf dem ursemitischen Gesetz, nach dem

---

10) type α は「transitive, active」, type β は「intransitive, stative, neutral, deponent」等の名称で呼ばれることもある。これらの名称は明確な意味論的カテゴリーをあらわすかのような印象を与え易いので，ここでは type α, β と呼ぶことにした。なお Старинин (p. 68) によれば，これは Cohen が初めて用いたもののようである。(Cohen et al. では使われている。)

11) Cohen et al. (pp. 50-51) にその分布状況が記されいる。

12) Philippi, F.: Das Zahlwort zwei im Semitischen. ZDMG 32 (1878) の p. 42; 同: Die semitischen Verbal- und Nominal Bildung. BA. 2. (1894) の pp. 378-379. 等参照。なお新しくは Malone, J. L.: A Hebrew Flip-Flop Rule And Its Historical Origins, LINGUA 30 (1972) pp. 422-448.

ein betontes *i* in geschlossener Silbe zu *a* wurde ; dies Gesetz gilt für das Hebräische und findet sich spurenweise im Syrischen.' と記している (1954, p.360)。√lbs '着る' の I 1. 1 sg. Pf. を例にとって示すと,

* labísku > labásku (=läbäsku)

となる。これは「Philippi の法則」と呼ばれる法則のゲエズ語での例である[13]。Brockelmann (GvGI § 52 e β) は *í (>*ə) > á (=ä) とらえている。

これに対して Blake はその詳細な研究の中でゲエス語にも言及し, Brockelmannへ の批判を行っている。主要な論点は, ゲエス語には多くの 'accented ə' があるから Brockelmann 説は受け入れ難いというものである。Blake は多くの 'accented ə' の例として, Praetorius をひいて qətə́lu「殺せ」(√qtl pl. m. Imp.) 及び nəgušə-kä「お前の王」(「王—お前の」) を挙げている (p. 83, fn. 17)[14]。ストレスの位置がどこかという点は別として, 'accented ə́ があるという指摘自体は勿論正しい。しかし, これらの例は全て開音節にある場合ばかりであり, 肝腎の閉音節という環境が全く考慮されておらず, ただ漠然と 'accented ə' の存在を主張するだけで的外れの批判に終ってしまっている。

5.3. läbäsku形についての Blake の説明は '... where (=läbäskä) the characteristic ä is best explained as analogical to the regular active type qätälkä. This explanation seems all the more likely as the characteristic ə (<i)

---

13) 主たる例はヘブライ語にみられる : √zqn (年をとる) の 2sg. m., Pf. zāqántā <*zaqinta. またシリア語 bṯa「娘」(<*bant<*bint). ただヘブライ語においてもあてはまらない場合が多くある (Bauer-Leander § 14 a′)。14 c B.C. 以降の変化であると考えられる。(Leander p. 68 ; Bauer-Leander § 14 c′) Philippi はヘブライ語, ゲエズ語の例から「原セム語の法則」と考えたわけであるが, これに対して Brockelmann (GvG. I § 52 Anm.)はアッカド語, アラビア語を問題にしてPhilippi には賛成できないとし, 後にははっきり原セム語の法則ではない旨を述べている(1940, p. 340)。この Brockelmann の見解は適切であり, Littmann がこの時点で何故「原セム語の法則」とことわっているのか理解に苦しむところである。

なお, Brockelmann はもう一例 * lidt > lad (=läd) 《Geburt》をあげているが, これは √wld の Imp. 形であり, 《Geburt》ならば lədät でなければならない。

14) Littmann (1917-18, p. 680 及び p. 699) は Praetorius と同じであるが, Conti Rossini(p. 34 での sg. 形の表示及び p. 35 の type β 形) によればストレスの位置は qə́təlu となる。

of the stative forms has disappeared entirely from the third personal forms of the strong verb. The characteristic stative ə is found only in verbs med. gutt., e.g., kəḥdä, kəḥədkä.' (p.83) とある。

つまり type α からの類推形成だと言っているわけである。この説明中 II L 動詞3 sg.m. Pf. 形が kəḥdä となってはるが，おそらく kəḥədä の誤りであろう。そうでなければここでの説明がなりたたなくなる[15]。しかしながら伝承発音によれば kəḥdä, kəḥədä が共に存在する (Littmann, 1954, p.363) のであり，kəḥdä を新しい伝承に基づくものと考えるのは，エチオピア・セム諸語中で完了形において type β が支配的なのはティグレ語だという事実からして困難である。従って kəḥdä も古い伝承に基づく形であるということになり，この点からしても Blake の説は肯定できない。

我々はむしろ，Brockelmann (そしてそれに先行する Dillmann Gr §60) と同様に *i (> *e) > ä という変化を考える。この変化はストレス (phonemic ではなかったにせよ) が，その位置にあった為にひきおこされたのだろう。ただその他にどの様な条件が存在していたかは明らかにし得ない。おそらく，広範囲にわたって変化が起ったのだろうが，後に何らかの理由から動詞 type β 以外ではその変化の結果が保たれなくなったのであろう。type β では type α と同一の形になるために保持されたのであろう。

6. II L 動詞 (Verba mediae gutturalis)

6.1. II L 動詞の完了形では，III L 動詞を除く他の動詞と同じく，二つのタイプ—type α と type β が存在する。3 sg.m. 形を例にとれば両者は R_1ä R_2ä R_3ä (type α), R_1ə R_2R_3ä (type β) とあらわされる。文法書 (例えば，Conti Rossini §72 ; Littmann, 1954, p.363) には，type β が普通であると記されているが，

15) Blake が拠り所にしたと思われる Praetorius には 'Das dem zweiten Redikal folgend *ə*, welches beim starken Verbum ganz ausgestossen wird, hat sich bei dem med. gutt. in der Aussprache erhalten, also *kəḥəda*, nicht *kəḥdä*, ...' (p.72) とある。

統計をとってみると必ずしもそうなってはいない[16]。ほぼ1対1の割合で存在しているのである。ただし，その出現頻度は別にしてのことである。type α は何ら問題はないので，以下において type β を論ずる。

5.2. で述べた様に，ゲエズ語強動詞の type β は，R_1ä R_2R_3— ～ R_1ä R_2ä R_3—という語基の交替を示す。(前者は母音で，後者は子音で始まる活用接尾辞をとる。) それに対して，II L 動詞では R_1 ə R_2R_3— ～ R_1 ə R_2 ə R_3— という交替がみられる。強動詞 √lbs '着物を着る'，II L 動詞 √mḥr '寛大である' を例に取り対照して示したものが次表である。

	強動詞	II L 動詞
3 sg. m	läbsa	məḥrä
1 sg. c.	läbäsku	məḥərku

6.2. Cohen は II L動詞の məḥrä/məḥərku の説明にあたって，läbsä/läbäsku と同じく *R_1a R_2i R_3a / *R_1a R_2i R_3ku という形（つまり，*maḥira / *maḥirku) に遡り，そこを出発点として考えるべきだとの立場に立っている(1927, p. 42)。この点は我々にも何ら異存はない。こうして設定した始点から，məḥra/məḥərku に至る過程を Cohen に従って図式化すると

(1) *maḥira > *mäḥəra > məḥərä > məḥrä

(2) *maḥirku > *mäḥərku > məḥərku

となる[17]。

---

16) Dillmann Lex. 及び Grébaut を基に統計をとると次の通りになる。
総計…… 134語
1. Pf 形
① α のみ ……52
② β のみ ……45
③ α, β 共にもっもの…37
以上共存例を含めて，
④ α をもつもの＝①＋③ 89
⑤ β 〃 ＝②＋③ 82
従って，④，⑤の全体に対する割合は，各々52%，48%となる。
2. Juss. 形
全て type β をもつ。就中，type α をも持つ √n'd, √zḥl, √ṭ'm 以外は全て type β のみをもつのである。

17) 或いは *maḥira > *miḥira > məḥərä, *maḥirku > *miḥirku > məḥərku と考えているのかもしれないがはっきりしない。ただここでの議論には，問題はない。

(1)の説明は妥当であるが，(2)はどうであろうか。Cohen の説明でははっきりしない点がある。それは，当然 *labisku > läbäsku との関連を考慮しなければならないのだが，その点が明確でないのである。ただ単に *labisku と同時代に遡ると言っているだけで，両者の構造の違いをもたらすに至った母音の同化の有無のみを考えればよいという様な態度なのである。しかしながら，もしも *maḥirku が *labisku と全く同じ変化過程をたどったとすると mäḥärku となり，決して məḥərku はあらわれないことになるのである。またあるいは，逆に第三喉音法則の前段階 *maḥirku > *mäḥərku に注目して，そこから labisku を考えると，これも現実に存在しない *läbəsku という形に到達してしまうのである。即ち，Philippi の法則がここにどの様にかかわっているのかを明確にしない限り充分な説明とは言えないのである。従って Cohen の見解を支持し明確化する為には，「L—C という環境では * i (> *ə) > ä という変化は起らなかった」としなければならないのである[18]。

6.3. ところで，L—C という環境においても * i (> *e) > ä という変化が起ったと仮定すると次のようになる。

	maḥira	maḥirku	labisa	labisku
a > ä, i > ə	↓	↓	↓	↓
	mäḥərä	mäḥərku	läbəsä	läbəsku
ə́(閉音節)>ä	↓	↓	↓	↓
	——	mäḥärku	——	läbäsku
第三喉音法則	↓		↓	
	məḥərä	——	——	——
ə(開音節)脱落	↓		↓	
	məḥrä	——	läbsä	——

この考えに基づくと məḥərku はどこにもあらわれて来ないので全く不可能だと思われるかもしれないが，即座に斥けることの出来ない長所があるのを見逃してはならない。

II L 動詞では type α も存在している点が，問題となる。Cohen 等はただ単に II L 動詞完了形で両方のタイプが見られるとしか言っていないが，Pf. 形で本来

18) Brockelmann は GvG. I. § 68 dγ で第三喉音法則の例として II L 動詞をあげ更に，§ 265, B. bα ではその第二音節の母音（即ち məḥərku の第二音節のə）は保たれたと言っているが，その際に 'gegen § 52 eβ' (§ 52 eβ=Philippi の法則）と注記している。

type α (mäḥärä) と type β (məḥrä) が共存していたとするのは適当ではない。それは II L 動詞の Juss. 形では，全てが type β を持ち，その上極めて少数の語を除いては type β しか持たないという事実による(註16参照)。この点からすれば mäḥärku (mäḥärä はこれからの類推とする) が得られるこの考えも無視できないことになる。ただ məḥərku を今度は məḥrä からの類推と考えなければならなくなる。

前節に示した Cohen を補足した意見と，ここで提唱した考えは共に成り立ち，どちらかに決定的に有利になる根拠はないと思われる。

6.4. I_1, III_1 以外では，II_2, III_2 でも二つの形が共存する。

e.g.	II_2	√l'l	'älä'(')älä / 'älə'(')älä	'äR_1äR_2R_2äR_3ä	(点線の右側は対応する強動詞形)
	III_2	√ṣ'l	täṣä'(')älä / täṣə'(')əla	täR_1äR_2R_2äR_3ä	

これは，喉音の gemination の消失の為に，II_1, III_1 形であるかのように感ぜられるに至った状態を反映しているのであり，喉音法則と直接にかかわる問題ではない[18)]。

7. III L 動詞 (Verba tertiae gutturalis)

7.1. III L 動詞の Pf., Impf., Juss., Imp. 形を 3 sg. m. と 2 sg. f. に例をとって示そう。

	3 sg. m.	2 sg. f.
Pf.	näš'ä	näša'ki
Impf.	yənäššə'	tənäššə'i
Juss.	yənša'	tənšə'i
Imp.	nəša' (2sg. m)	nəšə'i

√nš' '取る'

これで明らかなように，Impf. 以外では，

Pf. näš' ～ näsa'

Juss., Imp. n(ə)ša' ～ nšə'

18) 喉音の gemination については Ullendorff (1955, p. 217 ff.) 参照。

という語基の交替をみせる。

Pf. 形については *näšä'u > näšə'u > näš'u という変化が 3 pl. m. におこり（第三喉音法則）それからの類推で他の三人称形（3 sg. m. f., 3 pl. f.）が形成されたとする説明（Brockelmann GvG. I § 68 dγ, § 265 bα ; Praetorius § 16(2), § 91）がある[19]。この説明は もともと type α であったとするものである。

一方，Cohen (1927, p. 48 ff.) はそれに対して，III L 動詞は I_1（及び III_1）形では全て type β のみをもっていたという説明を行っている。こう考えれば，3 pl. m → 3 sg. m. f., 3 pl. f. という類推を持ち出す必要はなくなるのである。Juss. 形に眼を向けた場合 nša'- / nšə'- という語基は各々 *nsä' の第一，第三喉音法則を経た形なのである。つまりJuss. 形は全て type β を持つということになり，この点から Cohen の説明は説得力において Brockelmann のそれにまさることになる。

他のエチオピア・セム諸語の III L 動詞で type β が優勢かどうかを Cohen は調べているが，その中のハラル語について再検討してみたい。

Cohen (1927, p. 50) ではハラル語では type α のみとあるが，Cohen (1931, p. 291) では gab'a √gb' という type β 形をあげている。ただこれに対して Leslau は gäba'a という形を与えている (1951, p. 223 ; 1963, p. 67) が，また gäb'a も恐らくあり得ると述べている (1958, § 40)。しかし，古いハラル語について Cerulli (§ 128) の述べるところによれば，古くも III L 動詞に type β も存在したことがわかる。III L 動詞以外では type α しか無いということを考え合わせるならば，ハラル語では少くとも III L 動詞での type β の存在は疑いがなく，この点は，III L 動詞についての Cohen の考えを支持することとなる。

7.2. 派生語幹形（$=I_1$ 以外の諸形）等

III L動詞は，I_1，III_1 形以外の語幹形でも penultima に ä を持たない形のみが存在する。しかし，碑文及び一部の写本では penultima に ä のあらわれる語形

---

19) Pf. 形のパラダイムは näš'ä (3 sg. m) näš'ät (3 sg. f) näša'kä (2 sg. m) näša'ki (2 sg. f) näša'ku (1 sg. c.) näš'u (3 pl. m) näš'a (3 pl. f) näša'kəmu (2 pl. m) näša'kən (2 pl. f) näša'nä (1 pl. c).
なお，Ullendorff も Praetorius-Brockelmann と同様に考えているようである (1955, p. 213)

がみられる (Cohen 1927, p. 52 ; Littmann 1954, p. 364)[20]。この事実に対してどの様な説明を与えられればよいだろうか。

まず ä→ə/—Lä という異化の過程を考えることができる。しかし，これは既に第三喉音法則の項(4. 1.)で述べた通り，第二喉音法則とのかかわりからも困難な想定である。また，そのような変化が厳密にどのような音韻的環境で起ったかを定式化するのも困難であろう。従ってやはりこの点は Cohen (1927, p. 51 ff.) と同じく I_1 形からの類推によるものとするのが妥当であろう。

次に四語根動詞についてみると，三語根動詞のIII L動詞の場合と同じく IV L動詞では全ての語幹形で penultima にはäでなくてəがあらわれる。四語根動詞にはそもそも type α, βの区別がなく，IV L動詞以外は全て penultima にäを持つ形のみが存在するのである。例 gäftə'ä √gft' 'ひっくり返す，破壊する' に対して強動詞 dängäṣä √dngṣ '恐れる'. Juss. 形は先に述べたが，3 sg. m. Juss. をとると yənša' (√nš') である。これに動作の対象を示す人称接尾辞 -nni「私を」がつくと yənsə'änni となる。(間に仲介母音äが入る) これは喉音に後続している母音がäであるのに，先行母音äがではなくəになっているのである。

以上の例に対して，四語根の IV L動詞では，これは三語根動詞の III L 動詞 I_1 形 (=näš'ä) が拡張されたと考えられる。II L 動詞の məḥ(ə)rä 形は四語根動詞にまでは及ばなかったが，これは II L 動詞で type α, β がほぼ半々の割合で存在する (6. 1. 参照) ことと考えあわせれば了解されるであろう。Juss. 形の問題については，第三語根構成子音が喉音の場合には後続母音の如何にかかわらずəがあらわれるというシェーマが，目的人称接尾辞が付加された場合にも確立されたことを示しているのである。

7. 3. III L 動詞 Pf. 形において penultima にäではなくてəのあらわれる形が全語幹形に及び，更に四語根動詞に迄拡張されるに至った背景にどのような要因があったのかは残念ながら分らない。ティグリニア，ティグレ両語でも，III L 動詞

20) Dillmann, Lex. には √syḥ の I_2 形 säyyäḥä, √ṣw' の I_1 形 ṣäwwä'ä の 2 例がみられる。(修し ṣäwwä'ä と並んで säwwe'ä もあげられている。) 先にとりあげた碑文 DJE 1+2 には mäw(w)ä'ä(√mw') という形がみられる (p. 62). √mw' のI_1 形は mo'ä (<*w *mäw'ä) であり Dillmann. Lex. に mäw(w)ä'ä という形はみられない。Müller はこれを I_2 形と考えている。

は各々 $R_1äR_2R_3e$ (強動詞は $R_1äR_2äR_3ä$), $R_1äR_2R_3a$ (強動詞も $R_1äR_2R_3a$) という具合に type β を示し，ゲエズ語同様これが全語幹形に貫徹される[21]。なかでもティグリニア語では，III L 動詞以外では type α しか持たないという事実は，このシェーマが如何にしっかりと確立されたものであるかを示すものである。

参 考 文 献

Bauer-Leander = Bauer, H. und Pontus Leander, Historische Grammatik der hebräischen Sprache I. Hallle, 1922.

Blake, Frank R., 'The Apparent Interchange Between a and i in Hebrew' JNES 9 (1950), 76-83.

Brockelmann, Carl.

—— GvG I = Grundriß der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen I. Berlin, 1908.

—— 1940 = 'Neuere Theorien zur Geschichte des Akzents und des Vokalismus im Hebräischen und Aramäischen.' ZDMG 94 (1940), 332-371.

Cerulli, Enrico., Studi Etiopici I. La lingua e la storia di Harar. Roma, 1936.

Chaîne, Marius., Grammaire éthiopienne. Nouvelle édition. Beyrouth, 1938.

Cohen, Marcel.

—— 1927 = 'Consonne laryngales et voyelle en éthiopien—Conjugaison des verbes à laryngale médiane ou finale,' JA 210 (1927), 19-57.

—— 1931 = Études d'éthiopien méridional. Paris, 1931.

Cohen et al. = Cohen, M., Schneider, R., Strelcyn, S., Troupreu, G., Velat, B., 'Esquisse d'une étude chiffrée du verbe gueze (éthiopien

21) Leslau 1941, § 138 ; 1945 § 19 ; 1948 § 28 による。ティグレ語の 'ät 語幹形では揺れがみられるようである (Leslau 1945 § 19 e))。

classique)' Rassegna di Studi Etiopici 9, (1950) 41-64.

Conti Rossini, Carlo., Grammatica elementare della lingua etiopica. Roma, 1938 (Reprinted 1967)

Degen-Müller-Röllig = Degen, R. -Müller, W. -RölligW., Neue Ephemeris für Semitische Epigraphik, Band I. Wiesbaden, 1972.

Dillmann, August.

—— Gr. = Ethiopic Grammar. Second edition enlarged and improved (1899) by Carl Bezold, translated by James Chrichton. London, 1907.

—— Lex. = Lexicon Linguae Aethiopicae. Leipzig, 1865. (Reprinted Osnabrück, 1970)

Grébaut, Syllvain., Supplément au Lexicon Linguae Aethiopicae de August Dillman (1865) et Edition du Lexique de Juste d'Urbin (1850-1855). Paris, 1952.

Leander, Pontus., 'Einige hebräische Lautgesetz chronologisch geordnet.' ZDMG 74 (1920), 61-76.

Leslau, Wolf.

—— 1941 = Documents tigrigna. (Éthiopien septentrional) Grammaire et textes. Paris, 1941.

—— 1945 = 'The Verb in Tigré (North Ethiopic) ; Dialect of Mensa,' JAOS 65(1945) 1-45. 'Grammatical Sketches in Tigré (North Ethiopic) ; Dialect of Mensa,' 同 164-203.

—— 1948 = 'Supplementary Observations on Tigré Grammar,' JAOS 68 (1948), 127-139.

—— 1951 = 'Archaic Features in South Ethiopic,' JAOS 71 (1951), 127-139

—— 1958 = The Verb in Harari. Berkely and Los Angeles, 1958.

—— 1963 = Etymological Dictionary of Harari. Berkely and Los Angeles, 1963.

Littmann, Enno.

—— 1913, = Sabäische, griechische und altabessinischen Inschriften. Deutsche Axum-Expedition, Band IV. Berlin, 1913.

——1917-18 = 'Ge'ez Studien I/II/III' Nachrichten der K. Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen. Philogisch-historische Klasse. 1917, 627-702 ; 1918, 318-339.

—— 1929 = Cohen (1927) の評. Orientalistische Literaturzeitung. 1929, Nr. 7, col. 571-575.

—— 1954 = 'Die äthiopische Sprache,' Handbuch der Orientalistik. Erste Abteilung Dritter Band 'Semitistik' 350-375. Leiden, 1954.

Palmer, Frank, R., 'Comparative statement and Ethiopian Semitic,' TPS (1958), 119-143.

Praetorius, Franz., Aethiopische Grammatik. Karlsruhe und Leipzig, 1886. (Reprinted New York, 1955).

Старинин, В.П., Эфиопский Язык. Москва, 1967.

Ullendorff, Edward.

—— 1955 = The Semitic Languages of Ethiopia, A Comparative Phonology. London, 1955,

—— 1965 = The Ethiopians, An Introduction to Country and Poeple, Second edition. London, 1965.

On the 'Gutturalgesetze' of Gəʿəz

Yoichi TSUGE

This paper deals with the problems concerning the so-calld 'Gutturalgesetze' of Gəʿəz, the classical language of Ethiopia. Although we already have M.Cohen's outstanding article on this subject (Cohen, 1927), we don't think all the problems are given due solutions. So here we re-examine the matter to popose better solutions or interpretations or to support Cohen's views by giving certain additional proofs.

To face with the problems first it is important to make it clear that

in the vowel system of the language, the first order vowel of the Ethiopic syllabary stands in the opposition to the fourth order vowel by quality and not by quantity, and that these two vowels are not neutralised after a laryngal consonant as in Tigrinya, another Ethiopian language closely related with Gəʿəz.

Cohen maintains that the first 'Gesetz' should be interpreted in two ways : allongement sopposé and allongement réel. We reject his view and try to illustrate that the orthographical change reflects the sound change of *ä* to *a* before a syllable-closing layngal, which had already begun by the sixth century. As for the second and the third 'Gesetz' we slightly modify Cohen's opinions and give some newly found evidence.

Lastly, laryngal verbs, i. e. verba mediae gutturalis and verba tertiae gutturalis, are treated. The question of the first and second person forms of the verba med. gutt. is never settled till we take the type β forms of the strong verbs into consideration at the same time. We make this point clear and proceed to submit an alternative solution. As to verba tert. gutt. we agree with Cohen. We also take up some relevant topics which he misses.

（原稿受理日　昭和51年4月10日）